

犬丸川流域遺跡

縫原地区・平田地区・長善寺地区

中津市文化財調査報告 第44集



縫原地区出土瓦

2008
中津市教育委員会

序 文

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬渓などの緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな一面を見せはじめています。また、中津日田高規格道路や東九州自動車道が開通すれば、さらなる発展が期待されております。

しかし、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ多大な影響を与えていることも事実です。ここ数年調査件数は増加の一途をたどっており、今後も埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは変わらないことが予想されます。文化財は我々の祖先が私達に残した国民共有の財産です。現代に生きる我々が責任を持って、未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字福島に所在する市道八丁小平線拡幅工事に伴い中津市教育委員会が実施した犬丸川流域遺跡縫原地区・平田地区・長善寺地区の発掘調査報告書です。縫原地区では初期瓦が出土し、当時の瓦生産手法と供給地を考える上で貴重な発見となりました。平田地区では8世紀代の集落跡が見つかり、長善寺地区では中世の集落跡が発見されるなど中津市の歴史を知る上で当地域が重要な地点であることが再確認できました。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力賜りました関係各位、及び風雪の中、調査に従事して下さった方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

中津市教育委員会
教育長 北山一彦

例　　言

1. 本書は大分県中津市大字福島、大字伊藤田に所在する市道八丁小平線拡幅工事に伴う丸川流域遺跡発掘調査事業の報告書である。
2. 試掘調査は平成16年12月16日～12月28日まで行い、本調査は平成17年1月7日～3月11日まで実施した。整理作業は平成19年4月から平成20年1月まで行った。
3. 発掘調査は浦井直幸が行った。
4. 遺物の実測・写真撮影は浦井が行い、拓本・製図は金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）が行った。
5. 報告書で示している方位は磁北であり、SD=溝状遺構、SK=土壌、SX=性格不明遺構を表す。
6. 図面等記録類、出土遺物は中津市歴史民俗資料館にて保管している。
7. 本書の執筆・編集は浦井が行った。
8. 調査期間中及び報告書作成にあたっては下記の諸機関や多くの方々にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。また、平成19年9月には独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主催の埋蔵文化財担当者専門研修「古代・中世瓦調査課程」に参加する機会に恵まれた。研修中は、縫原地区出土瓦について、講師の先生方をはじめ、研究員の方々や研修生からご指導を頂いた。合わせて感謝の意を表したい。

大分県教育委員会文化課 大分県教育庁埋蔵文化財センター 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

小林昭彦 友岡信彦 村上久和 山崎信二 山本哲也（50音順、敬称略）

目 次

序文

例言

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査体制	1
第4節 調査地域の地理と歴史的環境	2
第2章 調査の内容	4
第1節 犬丸川流域遺跡の概要	4
1) 遺跡の立地と周辺の状況	4
2) 調査の概要	4
第2節 縫原地区の調査	6
1) 遺構と遺物	6
2) 小 結	14
第3節 平田地区の調査	16
1) 遺構と遺物	16
2) 小 結	20
第4節 長善寺地区の調査	21
1) 遺構と遺物	21
2) 小 結	24
写真図版	27
第3章 総 括	37
報告書抄録	38

挿図目次

第1章 序説

第1図 中津市内主要遺跡分布図	3
-----------------	---

第2章 調査の内容

第2図 犬丸川中流域の遺跡	4
第3図 遺跡周辺と調査箇所	5
第4図 縫原地区遺構配置図	6
第5図 縫原地区SD-1・2平面図、土層断面図	7
第6図 縫原地区SD-1出土遺物実測図（1）	9
第7図 縫原地区SD-1出土遺物実測図（2）	10
第8図 縫原地区SD-1出土遺物実測図（3）	11
第9図 縫原地区SD-2出土遺物実測図	12
第10図 凸面同心円タタキ痕瓦出土地点	13
第11図 平田地区遺構配置図、土層断面図	16
第12図 平田地区SD-1平面図、土層断面図、出土遺物実測図（1）	17
第13図 平田地区SD-1出土遺物実測図（2）	18
第14図 平田地区SD-2平面図・断面図、SX-1平面図・断面図	20
第15図 長善寺地区遺構配置図、SK-1平面図・断面図	21
第16図 長善寺地区SK-1、調査区内出土遺物実測図	23

写真図版目次

図版1 遺跡遠景、縫原地区全景	27
図版2 SD-2完掘状況、SD-1遺物出土状況、SD-1完掘状況	28
図版3 土層①、土層②、土層③、瓦出土状況、須恵器出土状況	29
図版4 縫原地区出土遺物（1）	30
図版5 縫原地区出土遺物（2）	31
図版6 縫原地区出土遺物（3）	32
図版7 平田地区検出遺構	33
図版8 平田地区出土遺物	34
図版9 長善寺地区検出遺構	35
図版10 長善寺地区出土遺物	36

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

平成16年5月26日、市道路課と市教育委員会市民文化センター文化財係（当時）の間で、市道八丁小平線拡幅工事における埋蔵文化財発掘調査の協議が行われた。協議において、拡幅域に対して発掘調査を行うことや水田部分の調査は稲刈り以降に行うことなどが確認された。試掘調査は、平成16年12月16日より開始した。

第2節 調査の経過

平成16年12月16日、し尿処理場東側からトレンチ法による試掘を開始。3・4トレンチ（縫原地区）にて溝状遺構を検出する。

12月17日、5トレンチ（平田地区）にて溝状遺構を発見。9トレンチまで掘削するが、遺構は確認できず、28日までトレンチの拡張や遺構の一部断ち割り、実測・写真撮影などをを行う。

平成17年1月7日、縫原地区から本調査開始。溝はS字状を描くことを確認。

1月13日、溝底（SD-2）に砂利層を検出。水の流れがあったことを確認。

1月17日、溝内より布目痕のある瓦片を発見。

1月21日、平田地区も並行して本調査開始。

1月28日、縫原地区SD-1よりほぼ完形の須恵器杯蓋・杯身を検出。

2月4日、縫原地区調査終了。

2月10日、平田地区SD-1から高台付杯身が出土。

2月28日、平田地区調査終了。現場引渡し。

3月5日、処理場正門前の工事地点（長善寺地区）にて遺構・遺物を確認。

3月7日から11日まで緊急調査。土壌から瓦器碗を多数発見。長善寺地区調査終了。

第3節 調査体制

平成16年度の調査体制は下記の通りである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 影木莊一郎（中津市教育委員会教育長）

調査事務 尾畠 豊彦（中津市教育委員会市民文化センター館長～平成17年2月28日）

國分 重喜（中津市教育委員会文化振興課長 平成17年3月1日～）

田中布山彦（中津市教育委員会市民文化センター係長～平成16年12月31日）

保科 真（ 同 係長 平成17年1月1日～）

富田 修司（ 同 係員）

調査担当 浦井 直幸（ 同 係員）

第4節 調査地域の地理と歴史的環境

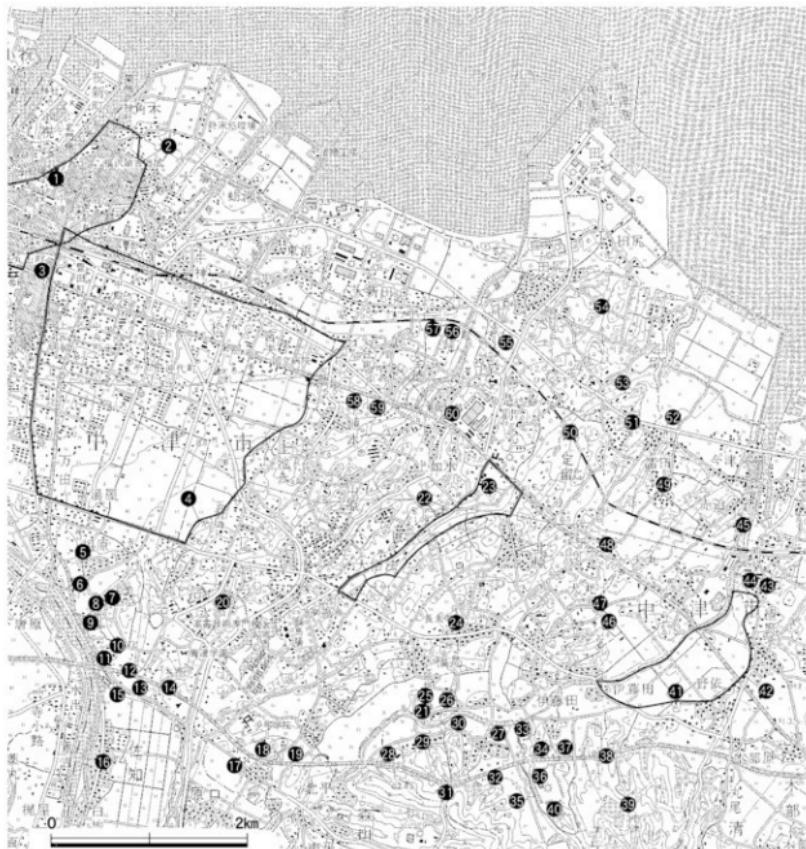
中津市は大分県の最北部に位置する。平成17年3月に下毛郡3町1村（本耶馬渓町・耶馬渓町・山国町・三光村）と市町村合併を行い、市域は大幅に拡大した。人口約8万6千人、面積491km²を誇り、北は周防灘を望み、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。市内には英彦山に源を発する一級河川山国川が南から北へ貫流する。上中流域は山々に囲まれた地形を成し、山国川やその支流により形成された河岸段丘上に集落は営まれる。周辺風景は頼山陽により絶景と称され、現在その多くは名勝耶馬渓として国の指定を受ける。下流域では沖積作用による平野部が広がる。その中心の沖代平野には古代に県下最大規模の条里制が施行された。その東には洪積台地「下毛原台地」が広がり、犬丸川を挟んで長峰台地が宇佐方面へと広がっている。洪積台地は起伏に富み、縄文海進時などは内陸奥深くまで入り江が入り込んでいたことが想像できる。

旧石器時代の石器は才木遺跡や大坪遺跡で発見されている。縄文時代早期後半期は黒水遺跡で陥し穴が検出された。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚や犬丸川沿いのボウガキ遺跡、ボウガキ遺跡に伴う入垣貝塚、女体像と見られる土偶が出土した高畠遺跡が挙げられる。弥生時代では前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡で貯蔵穴群が確認される。続く弥生時代中期では二列埋葬の土壙墓・住居跡・溝が福島遺跡で確認され、前期末から後期初頭の集落全域が森山遺跡で検出された。古墳時代の遺跡としては龟山（亀塚）古墳が挙げられる。造り出しや周溝を伴う古式前方後円墳とされるが詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の西南に造営される。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓が展開される。福島・伊藤田地区には岩井崎横穴墓群、城山古墳群、城山横穴墓群などが見られる。また、7世紀から9世紀にかけて相原山首遺跡で方墳が造られる。その主体部は8世紀中頃から後半に横穴式石室から火葬墓に移行すると共に蔵骨器をもつ方墳があらわれ、9世紀前半以降は火葬墓や土壙墓を構築する。

古代には寺院遺跡として、7世紀末に白鳳系の相原庵寺が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制が施行されたと考えられている。条里の南限は「勅旨街道」と呼ばれる古代の官道が走る。8世紀後半にはその官道に沿う条里を眼下に望む永添の地に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷遺跡が確認された。須恵器や瓦を作製した生産遺跡には、踊ヶ迫窯跡、ホヤ池窯跡、草場窯跡、洞ノ上窯跡、城山窯跡群などがある。集落遺跡としては古墳時代から10世紀まで続き緑釉陶器や墨書き土器が出土した三口遺跡がある。

中世には、12世紀末～13世紀前半の井戸跡から縄杵や下駄など多量の木器類が検出された前田遺跡がある。また、田丸遺跡の長久寺城をはじめ、中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入部によって中津城が築城される。近年の調査により中津城は中世居館の上に造営されたことが明らかとなり、加えて石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることも判明した。

近世には関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部する。城・城下町は細川氏によって整備・拡張され、その後1632（寛永9）年に小笠原氏が入部し城下町の造営は完成を見る。1717（享保2）年には奥平氏が入部し、1871（明治4）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 諸田遺跡 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ窯跡 | 50. 定留貝塚 |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畠遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 定留遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 佐知遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 天貝川遺跡 |
| 5. 相原魔寺 | 17. 横遺跡 | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 和間貝塚 |
| 6. 三口遺跡 | 18. 黒水遺跡 | 30. 大丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 由尻大追遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 大坪遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 中須遺跡 | 55. 是則遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 若旗遺跡 | 56. 全徳遺跡 |
| 9. 坂手隈横穴墓群 | 21. ボウガキ遺跡 | 33. 城山横穴墓群 | 45. 十前垣遺跡 | 57. ガラヌノ遺跡 |
| 10. 弩旗郎古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 野田遺跡 | 58. 亀山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 上畠成遺跡 | 59. 石堂池遺跡 |
| 12. 勘助野地遺跡 | 24. 丸丘遺跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 諸田南遺跡 | 60. 舞手川流域遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S = 1/50,000)

第2章 調査の内容

第1節 犬丸川流域遺跡の概要

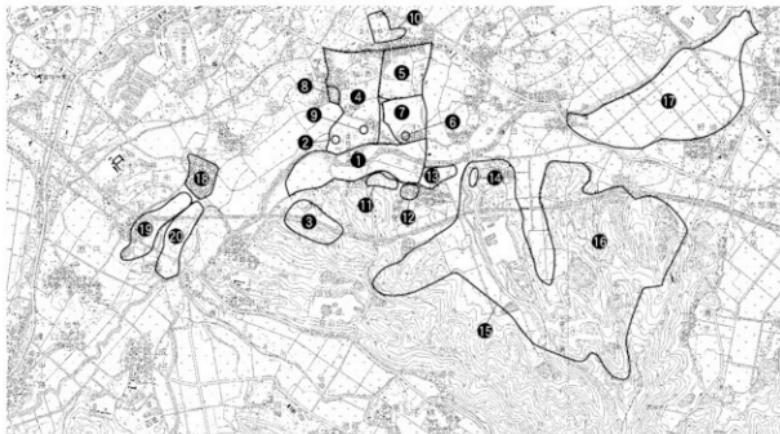
1) 遺跡の立地と周辺の状況（第2・3図）

犬丸川流域遺跡は周防灘に注ぐ犬丸川の中流域の河岸段丘上に立地している。前方には福島の台地が広がり、後方には八面山から派生する丘陵が迫る地点に遺跡は形成されている。

現在、河岸段丘上には水田が営まれ、台地上には畠地が広がっている。この景観がいつ頃形成されたのか定かではないが、河川改修事業に伴い行われた犬丸川流域遺跡の調査では、川沿いに古墳初頭の集落跡（1990年度第4地点）や12世紀後半頃の中世居館跡（1992年度第7地点）が発見されている。¹⁾また、台地上には縄文時代後期のボウガキ遺跡²⁾や斜面に入垣貝塚が存在し、弥生中期の大規模集落が展開していたことが判明している。後方の丘陵中腹には、弥生時代の集落遺跡である森山遺跡³⁾や古墳時代後期から古代にかけて操業した窯跡群が多数存在する。さらに、丘陵先端部には多くの横穴墓が築かれることから、この丘陵が生業の場であり、終焉の場であったことがわかる。中世には田丸遺跡や福島城跡などの中世城館をはじめ福島地下式横穴⁴⁾や城土地下式横穴なども存在する。この地域に連続として人々が居住していたことが窺い知れる。

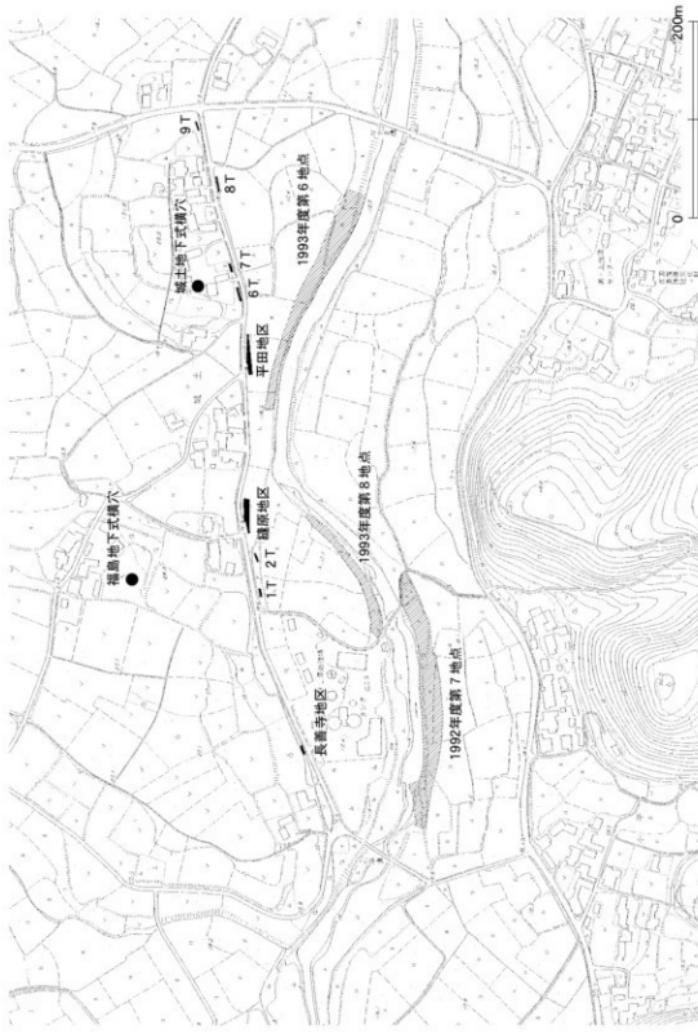
2) 調査の概要（第3図）

調査地周辺は遺跡の多い地域であることから、何らかの遺構は発見されることを予測して調査に



- | | | | | |
|------------|------------|-------------|---------------|-------------|
| 1. 犬丸川流域遺跡 | 5. 三保遺跡 | 9. 福島地下式横穴 | 13. 前田遺跡 | 17. 野依地区条里跡 |
| 2. ボウガキ遺跡 | 6. 城地下水式横穴 | 10. 田丸遺跡 | 14. 城山横穴墓群 | 18. 加来居屋敷遺跡 |
| 3. 森山遺跡 | 7. 城土遺跡 | 11. 岩井崎横穴墓群 | 15. 野依・伊藤田窯跡群 | 19. 黒水道路 |
| 4. 福島城跡 | 8. 福島城跡 | 12. 上伊藤田城跡 | 16. 踊ヶ追窯跡 | 20. 大坪遺跡 |

第2図 犬丸川中流域の遺跡 (S=1/40,000)



第3図 遺跡周辺と調査箇所 (S = 1/5,000) 昭和47年中津市都市計画図を元に作成

着手した。

試掘調査は、し尿処理場東側から開始し、9本のトレンチを設定した。幾つかのトレンチでは若干の遺物を見たものの、遺構を確認できたのは3・4トレンチと5トレンチのみであった。

3・4トレンチ（縫原地区）は、1993年度第8地点の北側に位置する。確認できた遺構は、古墳時代後期の溝状遺構とピットである。溝は掘り返しが行われており、2つ以上の溝が一部で重複していた。SD-1は当初に掘られた溝であり、SD-1埋没後にSD-2が構築されている。SD-1埋土からは凸面に同心円タタキ痕をもつ瓦片などが複数出土した。同種の瓦は踊ヶ追窯で生産されている。⁵また、SD-2最下層から大型の須恵器杯身が出土した。

5トレンチ（平田地区）では、8世紀後半の溝状遺構2条と複数のピット、性格不明遺構を発見した。特にSD-1からは当該期の須恵器・土師器が多く出土している。

長善寺地区は、現場引渡し後の工事中に発見した遺構である。土壇1基と時期不明の石列を発見した。調査区内は工事による掘削が著しく、遺構の残存状況は不良であったが、土壇内やその周辺から多数の瓦器碗などを発見した。また、16世紀代の遺物も多数検出できることから、その時期の遺構が存在した可能性がある。

各地区出土遺物の数量は、それぞれパンケース2箱分である。

第2節 縫原地区的調査

1) 遺構と遺物（第4・5図）

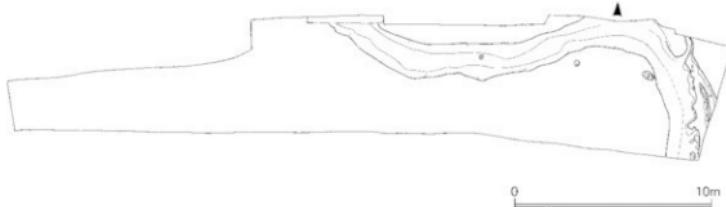
縫原地区では、250m²の調査を行った。第5図土層②③でわかるように遺構検出上面層は水平の堆積状況を示すことから、ある時期に整地が行われていることがわかる。よって、遺構はある程度削平を受けているものと思われる。

検出できた遺構は、溝状遺構と2基のピットである。溝状遺構は調査区北側から出現し、東方向へ蛇行後、南へ向きを転じる。配置図では溝状遺構は1条に見えるが、東端部でSD-1・2が重複している。平面図と土層①の赤線がSD-1の遺構ラインであり、点線部分は想定ラインである。土層①を見るとSD-1埋没後にSD-2が掘られていることがわかる。

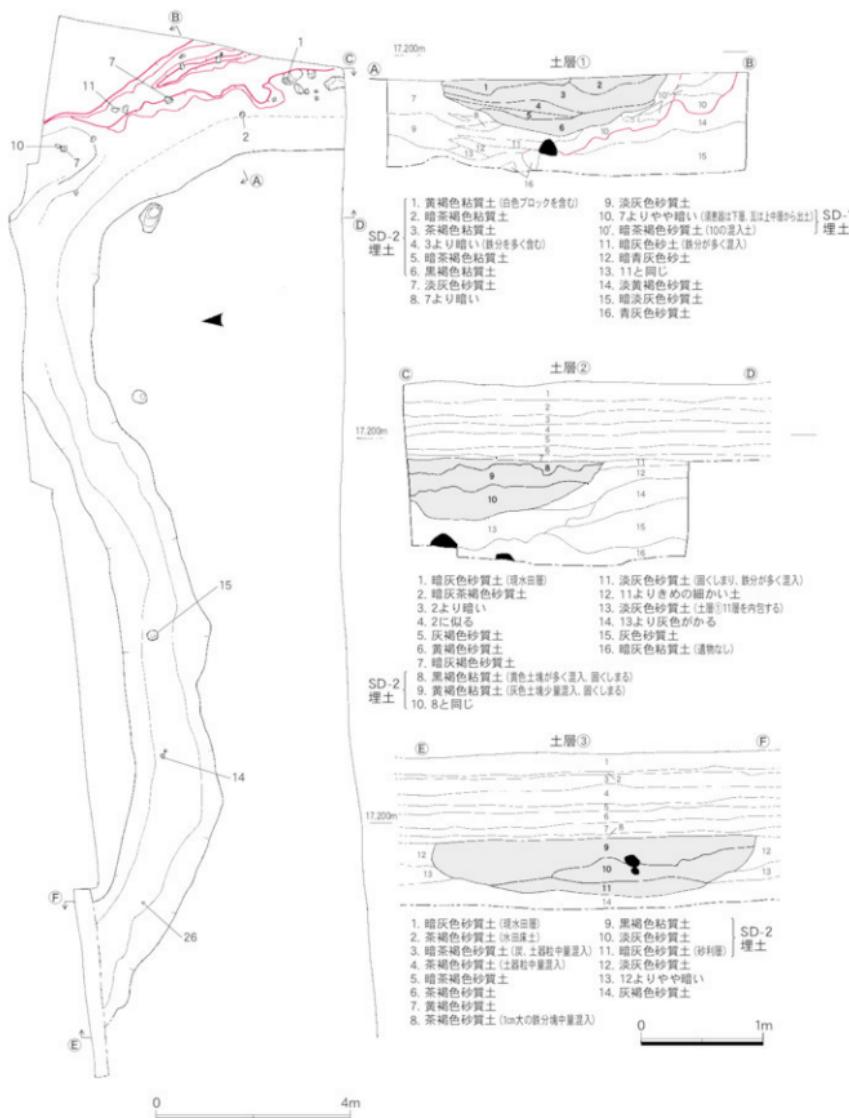
a. 溝

SD-1（第5図）

東西方向に伸びる溝の東端で検出した。最大幅は溝の両肩が検出できていないため不明である。最大深60cm、検出された長さは1.6mを測る。土層①からSD-1は東側へ拡幅されていることが窺え



第4図 縫原地区遺構配置図 (S =1/250)



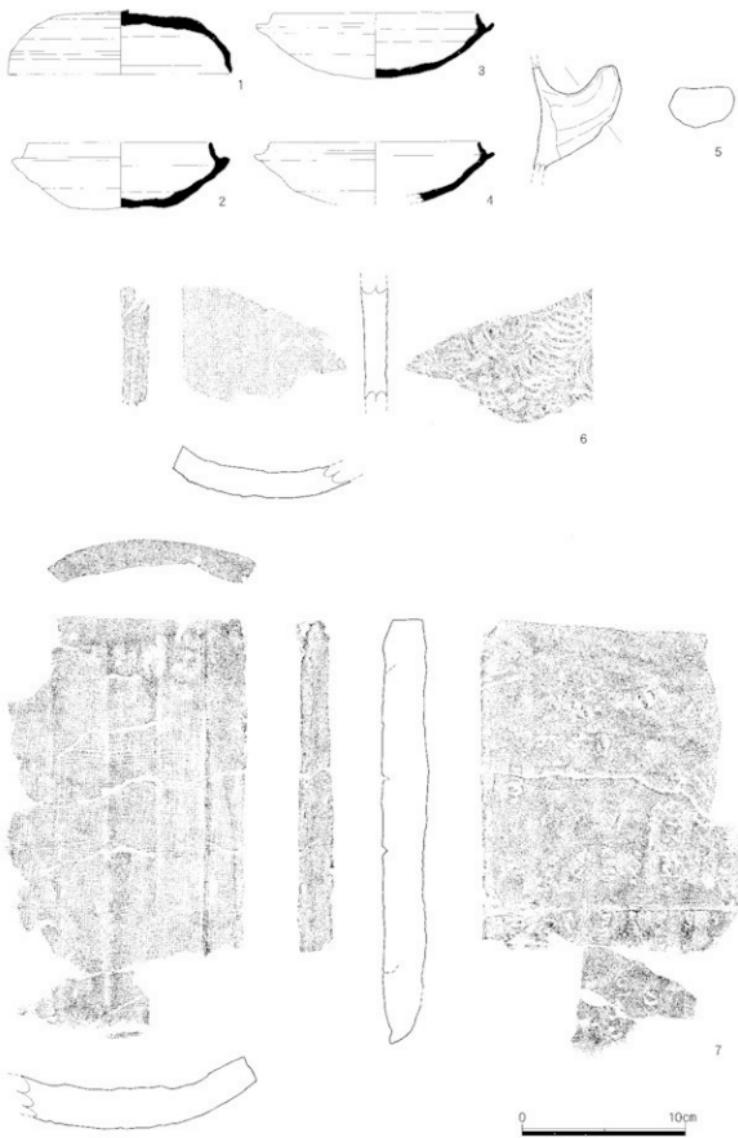
第5図 縫原地区 SD-1・2平面図 (S=1/100)、土層断面図 (S=1/40)

る。溝埋土上中層からは瓦が多く出土し、最下層からは、ほぼ完形の須恵器杯蓋・杯身が出土した。遺物は第6図から第8図かSD-1出土遺物である。

1から4は須恵器である。1は杯蓋で、口径13.8cm、器高3.9cmを測る。天井部から端部へかけて湾曲しながら降下し、内面端部は段を有する。天井部付近は回転ヘラ削りを施し、ヘラ切り後難なナデを施す。他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈す。2から4は杯身である。2は口径11.3cm、立ち上がり高1.1cm、高さ4.0cmを測る。立ち上がりは垂直気味で、受け部は肥厚する。底部は平坦である。体部下半に回転ヘラ削りを施し、底部はヘラ切り後難なナデを施す。他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。3は復元口径12.6cm、立ち上がり高1.0cm、高さ4.0cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、端部は尖る。受け部は上外方に伸び、底部は丸みを呈する。外面中位から底部へかけて回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。焼成は良好で、灰褐色を呈する。4は復元口径12.8cm、立ち上がり高0.8cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、端部は尖る。受け部は丸みをもち、体部は湾曲しながら下方へ降下する。外面下半は回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

5は瓶の把手である。先端部は上方に反り、ヘラ削りで仕上げる。

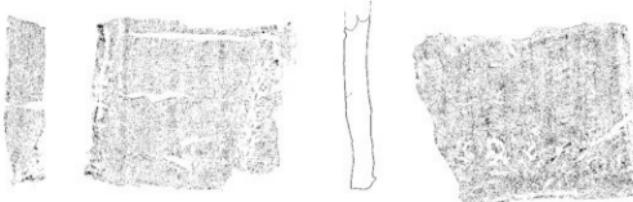
6から12は須恵質の瓦である。6は平瓦の側端部で凸面に同心円タタキを施す。凹面は模骨痕のある布目痕が認められる。側面はヘラ削りで破面は不明である。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。7は平瓦で狭端から広端の長さは25.8cmを測る。凸面は全面に同心円タタキ後、横方向のカキ目調整や縦方向にヘラ状工具による削りを施す。カキ目と削りに順序はない。凹面は模骨痕のある布目痕が残る。粘土紐は7単位確認でき、幅は3cmから4cmである。側面はヘラ削りにより破面は不明であるが、凹面側に条線状の凹みが認められることから、破面が存在した可能性が高い。狭端面は丁寧なヘラ削りを行い、凹凸両面上端と凹面側端も丁寧なヘラ削りを施す。また、凹面上端のヘラ削りの下に指頭痕が複数残る。広端面は難なナデで仕上げ、丸みを呈する。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。8は平瓦の側端部で凸面に同心円タタキ後、縦方向にヘラ状工具による削りを施す。凹面は模骨痕のある布目痕が残り、右端に布の綴じ合わせ目状の痕跡が残る。また、下部に棒板連結組状の痕跡も残る。側面はヘラ削りを行うが、凹面側に破面が残存する。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。9は平瓦の端部で、凸面は同心円タタキ後、縦方向にヘラ状工具による削りを施す。凹面は模骨痕のある布目痕が残り、右端に8同様、布の綴じ合わせ目状の痕跡が残り、左右の布目は平行しない。上部には、棒板連結組状の痕跡も残る。側面はヘラ削りを行い、一部に破面が残る。端面はヘラ削りを行う。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。8・9は同一個体の可能性が高い。10は平瓦の端部である。凸面側は同心円タタキ後、横方向にカキ目調整を行い、その後縦方向にヘラ状工具による削りを施す。凹面側は模骨痕のある布目痕が残る。側面はヘラ削りを行うが、凹面側が若干屈折することから、この部位に破面が存在した可能性がある。端面や凹凸面端部はヘラ削りを施し、端面と側面の交点も面取りを行っている。また、凹面上端のヘラ削りの下に指頭痕が複数残る。胎土は精緻で、焼成は良好である。11は平瓦の広端部で、凸面は木目平行直交タタキ後、丁寧にナデ消しを行う。凹面は布目痕を消すような丁寧なヘラ削り後、ナデを施す。一部、模骨痕や布目痕が残存している。側面はヘラ削りで破面は不明である。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。12は平瓦の側端部である。凸面は木目平行直線タタキ後ナデを施し、凹面



第6図 縫原地区 SD-1 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



8



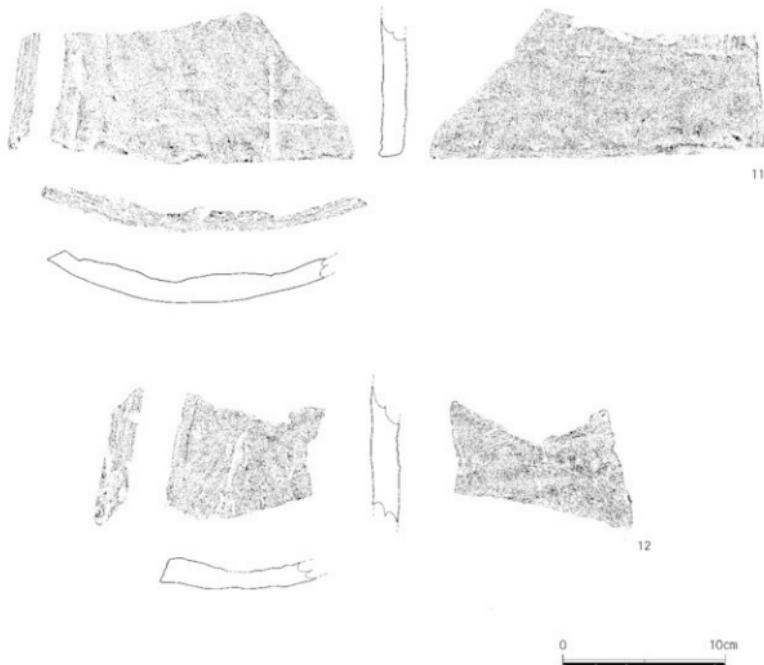
9



10

0 10cm

第7図 縫原地区 SD-1 出土遺物実測図 (2) ($S = 1/3$)



第8図 縫原地区 SD-1 出土遺物実測図 (3) ($S=1/3$)

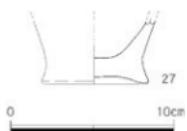
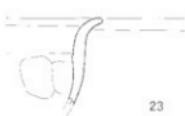
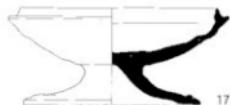
はヘラ削りを施す。側面はヘラ削りで破面は不明である。胎土は精緻で、焼成は良好である。色調は淡茶色を呈する。

SD-2 (第5図)

東西方向に伸びる溝で、東側はSD-1埋没後に構築されている。土層①～③の灰色スクリーントーンがその土層である。最大幅2.60m、深さ約45cm、検出された長さは約20mである。溝底には砂利層があり、流水していたことがわかる。流水方向は、溝底のレベル差が西側と東側で僅少であるため不明であるが、調査区南の犬丸川の存在から、北から南へ流水していたと推測できる。

第9図はSD-2出土遺物である。遺物は黒褐色粘質土から多く出土し、14・15は溝最下層から出土した。

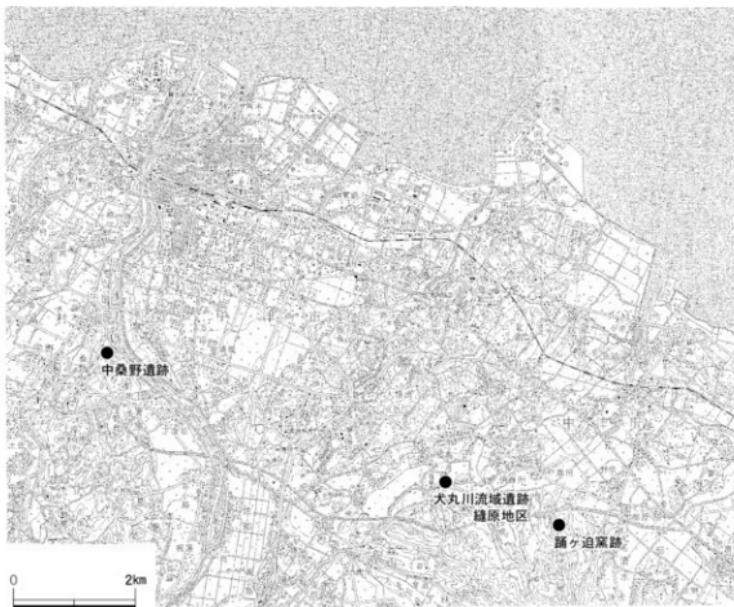
13から21は須恵器である。13は杯蓋で、口径13.1cm、高さ3.1cmを測る。天井部から端部へかけて湾曲しながら降下する。天井部は回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。14から16は杯身で、14は口径12.0cm、立ち上がり高1.0cm、高さ4.0cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、端部は丸くなる。底部は平坦である。体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りを施し、「V」字状のヘラ記号が残る。他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈



0 10cm

第9図 縫原地区 SD-2 出土遺物実測図 (S=1/3)

する。15は口径16.9cm、立ち上がり高1.4cm、高さ6.7cmを測る大型品である。立ち上がりは内傾し、端部は丸い。受け部は上外方に伸び、底部はやや丸みをもつ。外面下位から底部へかけて回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。底部外面は直線3本の組み合わせのヘラ記号が残り、内面底部付近に指押さえ痕が残る。焼成は良好で、灰褐色を呈する。16は口縁部の断片資料で、立ち上がり高0.6cmを測る。立ち上がりは垂直気味であり、端部は丸い。受け部は丸みをもつ。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。17是有蓋高杯で、口径12.0cm、高さ6.0cm、脚径10.9cm、脚高2.4cmを測る。杯は緩やかに伸び端部へと至る。脚は大きく開き、接地した後水平に伸び、端部は丸くなる。杯部下半は回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。18は壺で、復元口径18.8cmを測る。口縁部は外反し、端部は方形を呈する。内外面とも口縁部は横ナデを施し、体部は一部手持ちヘラ削りを行う。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。19は平瓶で、復元口径7.3cmを測る。口縁部は内湾しながら伸び、端部は丸くなる。横ナデを施す。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。20は盤の脚か。脚はやや開き気味に降下し、端部で跳ね上がる。横ナデを施す。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。21は体部の断片資料で、外面は格子目タタキ後、カキ目調整を行う。内面は同心円タタキを施す。22は土師器の鉢で、体部は上外方に伸び端部で僅かに外反する。丁寧にナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。23は弥生土器の甕で、口縁端部は短く外反する。内面に指頭圧痕が残り、他はナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は外面淡茶色、内面暗茶褐色を呈する。24は



第10図 凸面同心円タタキ痕瓦出土地点 (S=1/80,000)

甕で、口縁部は外反し、端部は丸くなる。外面は縱方向刷毛目で仕上げる。焼成は良好で、色調は淡茶色を呈する。弥生土器か。25は甕の底部で、内外面とも縱方向刷毛目で仕上げる。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。弥生土器か。26はタコ甕で、底部はやや丸みをもち、体部はやや内湾しながら伸びる。外面は指頭圧痕が多数残り、内面は指ナデ後、指押さえを行う。焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈する。27は弥生土器の甕の底部で底径6.4cmを測る。底部中央にかけて窪み、ナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は淡茶色を呈する。流れ込みの資料であろう。

溝底から出土した14・15について、14は完形の土器を破碎し、破片を重ねるようにして配置された様子が窺える。15は底部を上に向け、伏せられるような状態で出土した。その出土状況から、溝底絶時の何らかの祭祀行為に伴い配置されたものと考える。

2) 小 結（第10図）

ここでは縫原地区出土遺物を検討し、それらの年代確定を行う。その後、初期瓦が出土した周辺の状況について触れる。

a. 須恵器と遺構について

縫原地区では時期決定に有効な須恵器杯蓋・杯身が出土している。

SD-1の杯蓋・杯身の口径は、それぞれ13.8cm・11.3~12.8cmを測り、立ち上がり高は0.8~1.1cm、杯蓋・杯身の器高はそれぞれ3.9・4.0cmを測る。天井部や底部は回転ヘラ削りやヘラ切り後難なナデを施す。SD-2の杯蓋・杯身の口径は、13.1・12.0cmを測り、立ち上がり高0.6~1.0cm、杯蓋・杯身の器高はそれぞれ3.1・4.0cmを測る。天井部や底部は回転ヘラ削りで仕上げる。なお、第9図15の資料は大型品であるため数値に含んでいない。

九州地方の須恵器については、多くの研究者による編年案が提示されており、須恵器の実年代や窯跡の年代が検討されている。⁶ 今回出土した資料は、その特徴から山田3号窯出土資料や瓦ヶ迫窯出土資料の間に位置付けられるものと考えたい。小田編年のII-3B期～II-4A古期の間に、田辺編年のTK43～TK209の間に位置付けられると思われる。遺物の実年代については、両窯出土資料を6世紀末とする研究や、山田3号窯を6世紀後半に、瓦ヶ迫窯を6世紀末～7世紀初頭に比定する研究がある。⁷ 私見では、両窯跡出土資料の法量や形態差を重視し、両窯跡資料は分離可能と考えることから、後者の研究を援用し、遺物の実年代は6世紀末～7世紀初頭としたい。よって、SD-1・2が機能した年代もその頃に比定する。

b. 瓦について

SD-1からは図示した7点の瓦が出土した。その内凸面に同心円タタキを施すものは5点、平行タタキを施すものは2点存在する。同心円タタキを施すものは破面が通常の瓦と逆の位置に残る特殊な技法で製作されている。この種の瓦は、伊藤田窯跡群の踊ヶ迫窯跡と福岡県上毛町中桑野遺跡で発見されており、両遺跡間の需用供給関係が指摘されている。⁸

以下、縫原地区出土瓦を分類し、生産地の確認を行う。

I類 第6図6で、凸面に同心円タタキを施した後、何も調整を加えないタイプ。

- II類 第6図7・第7図8から10で、凸面に同心円タタキ後、カキ目調整や削りを行うタイプ。
III類 第8図11・12で、凸面に木目平行直交タタキや木目平行直線タタキを施し、凹面の布目痕や模骨痕を消すタイプ。

この内 I類と II類は同種の調整で仕上げられているが、III類はそれらとは異なる調整が行われている。よって、一見するとそれらは異なる窯で焼成されたものと思われるが、先述したようにこれらの瓦は踊ヶ迫窯跡や中桑野遺跡でも確認されており、またその出土割合も近似することから、踊ヶ迫窯跡で生産されたものとみることができる。また、須恵器製作に用いる当て具をタタキ板として用いていることから、須恵器工人が生産に関わったことが推測できる。

次に、瓦の製作年代について考える。これまで実年代については、踊ヶ迫窯跡出土の須恵器小片をもって6世紀末から7世紀初頭を下らない時期に比定されていた。⁹ このため、年代決定に若干の不安を残していたが、今回6世紀末～7世紀初頭と見なすことができる良好な須恵器資料が共伴して出土した。よって、瓦はその年代に製作されたとみて大過ないと言えよう。

c. 小結

今回、縫原地区においていわゆる初期瓦が検出されたことや、共伴する須恵器からある程度の年代が割り出されたことは大きな成果であった。さらに中桑野遺跡以外に供給地が判明したことでも重要である。しかしながら、この瓦がどのような建物に葺かれていたのか、その解明には至らなかつた。中桑野遺跡では瓦は表採されたのみであり、本調査区からも溝以外の遺構は検出していない。遺構の中心は、調査区北側の微高地状に想定できるのかもしれない。

ところで、近年、亀田修一氏は、6世紀前半に上毛郡地域に設置された「桑原屯倉」と中桑野遺跡について論じ、初期瓦が出土する遺跡を屯倉の候補の一つとする可能性について論じている。¹⁰ 仮に中桑野遺跡周辺を屯倉の中心とすれば、本調査区周辺にその関連施設が存在したことが想定できるが、想像の域を出ない。

いずれにせよ、今後は瓦が葺かれた建物＝寺院という図式だけでなく、広い視野を持ち周辺の調査を行っていきたい。

- (註) 1 栗焼憲児『犬丸川流域遺跡群』中津市教育委員会 1997
2 村上久和『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会 中津市教育委員会 1992
3 村上久和『福多田遺跡 森山遺跡 寺迫遺跡』大分県教育委員会 1992
4 渋谷忠章『福島地下式横穴』中津市教育委員会 1974
5 村上久和・吉田寛・宮本工『豊前ににおける初期瓦の一様相』大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦』『古文化談叢』18 1987
6 註5文献。小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集2・日本古代』1979。「須恵器の源流－九州」「日本陶磁の源流」1984。小林昭彦・高橋徹「豊前地方における須恵器」『考古学ジャーナル』No274 1987年。佐藤浩司「豊前の6～9世紀の土器」『古文化談叢』34 1995
7 前者は小林昭彦氏や高橋徹氏の研究で、山田3号窯と瓦ヶ迫窯出土資料は同じ段階の土器として扱われている。後者は註5文献。
8 註5文献
9 註5文献
10 亀田修一『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館 2006 397頁

第3節 平田地区の調査

1) 遺構と遺物（第11図）

平田地区では、140m²の調査を行った。

検出した遺構は、溝状遺構2条と性格不明遺構1基、ピットなどである。SD-1・2は南北方向の溝である。第11図土層断面図を見ると土層上位は水平堆積を示すことから、遺構上面は整地により削平されていることが推測できる。また、性格不明遺構を検出した調査区東端付近で地山がなだらかに下降している。ここには人頭大の川原石が放り込まれており、今回は遺構として取り扱った。

a. 溝

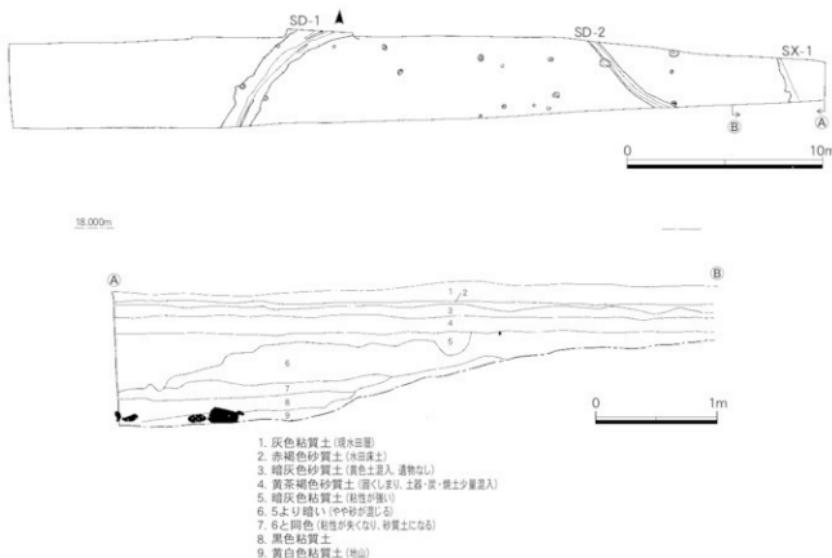
SD-1 (第12図)

調査区西よりで検出した南北方向の溝である。最大幅1.5m、深さ50cm、検出できた長さは7mを測る。底面は平坦ではなく、段をなす地点も存在したが二段掘りのような形状ではない。西側は垂直的に立ち上がり、東側はなだらかな形態を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、下層に砂利層は認められなかった。

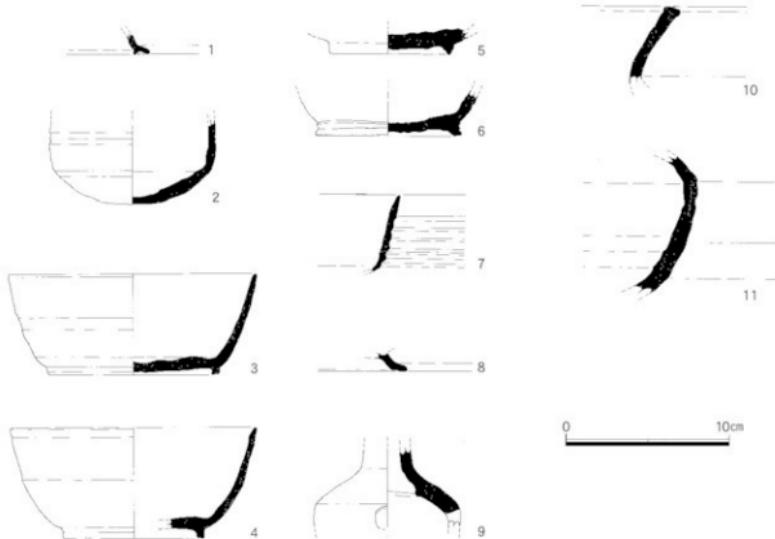
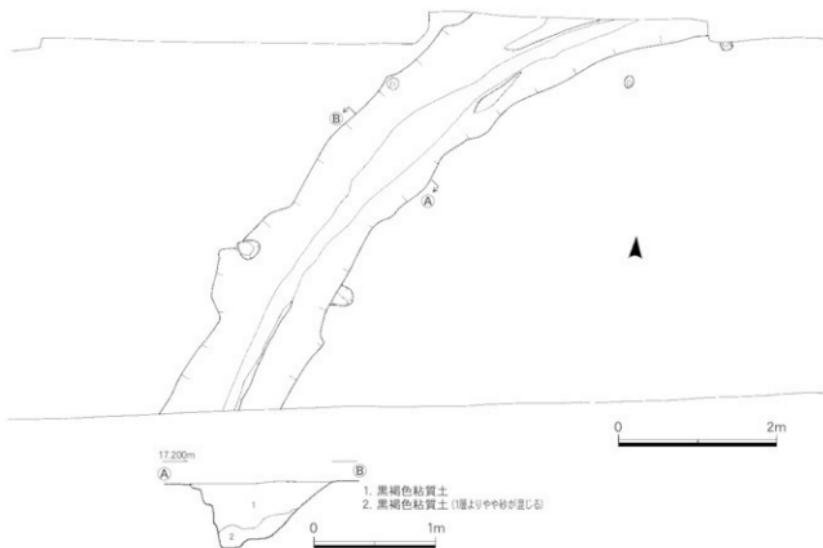
遺物は溝内全般から出土した。埋土は单一であったことから、一括して取り上げを行った。

第12・13図はSD-1出土遺物である。

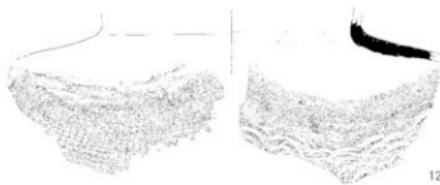
1から13は須恵器である。1は杯蓋の断片資料で、かえりをもつ。受け部は外方に屈曲し、かえ



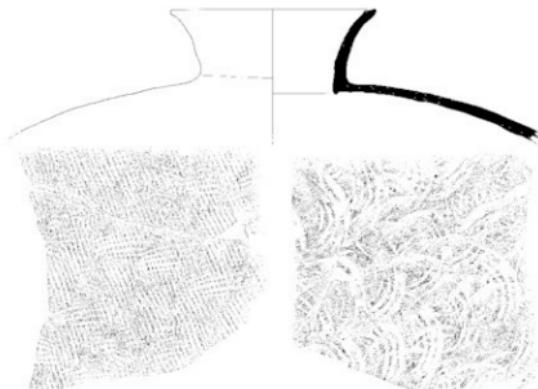
第11図 平田地区遺構配置図 (S=1/250)、土層断面図 (S=1/40)



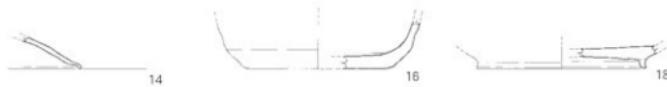
第12図 平田地区SD-1平面図 (S=1/60)、土層断面図 (S=1/40)、出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



12



13



14

16

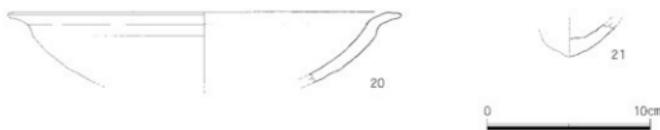
18



15

17

19



20

10cm

第13図 平田地区SD-1出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

りは内傾する。横ナデを施し、焼成は良好で、色調は暗灰色を呈す。2から8は杯身で、2の体部は中位から垂直に立ち上がり、外面に二つの段をもつ。底部は丸く不安定である。中位以下は回転ヘラ削りを施し、他は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。3は復元口径15.2cm、器高6.2cm、高台径10.6cmを測る。体部は上外方に伸び、端部はやや尖る。高台は底部外縁よりに付き、内側で接地する。底部はヘラ切り後難なナデを施す。外面は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。4は復元口径15.2cm、器高6.8cm、高台径8.7cmを測る。体部は上外方に伸び、端部はやや尖る。高台は底部外縁に付き、底部はヘラ切りを行う。外面は横ナデを施す。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。5は復元高台径7.3cmを測る。高台は底部外縁によりに付き、底部はヘラ切り後難にナデする。外面は横ナデを行う。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。6は高台径9.1cmを測る。高台は底部外縁に付き、段を有する。底部はヘラ切り後未調整。焼成は良好で、色調は外面青灰色、内面暗茶色を呈する。7は口縁部の断片資料である。外面に6本の稜をもち、端部はやや尖る。外面は横ナデを施す。焼成は良好で、色調は暗灰色を呈する。8は高台部の断片資料で、やや開き気味に降下し、外反する。横ナデを施す。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。9は底で、やや張り氣味の肩をもち、胴部に穿孔がある。器壁が荒れており外面の調整は不明。胴部内面は横ナデで、頸部はシボリ痕が残る。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。10は口縁部の断片資料である。緩やかに外反し、端部は若干肥厚する。横ナデを施す。焼成は良好で、色調は青灰色を呈する。11は長頸壺の体部である。肩はやや張り、体部は緩やかに湾曲しながら降下する。肩部は横ナデで、胴部下半は回転ヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。12は甌の断片資料である。外面は格子目タタキを施し、内面は同心円タタキを施す。焼成は良好で、外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈する。13は横瓶の断片資料で、口径12.1cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部は尖る。肩部は緩やかに内湾し降下する。外面は工具押さえと格子目タタキ、内面は同心円タタキを施す。口縁部は横ナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は外面灰色、内面灰褐色を呈する。

14から20は土師器である。14は杯蓋の断片資料で、端部は内湾し接地する。焼成はやや不良のため調整は不明瞭である。色調は橙褐色を呈する。15から19は杯身で、15は復元口径14.7cmを測る。体部はほぼ直線的に伸び、端部はやや尖る。横ナデを施し、焼成は良好で、色調は褐色を呈する。16は復元底径18.5cmを測る。体部は上外方に伸び、横ナデを施す。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。17は復元底径7.5cmを測る。底部はヘラ切り後未調整である。焼成はやや不良で、色調は淡茶色を呈する。18は復元高台径10.5cmを測り、高台は底部外縁によりに付き、ヘラ切り後ナデを施す。焼成はやや不良で色調は茶褐色を呈する。19は復元高台径12.6cmを測り、高台は底部外縁に付く。丁寧なナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。20は高杯の杯部か。復元口径24.1cmを測る。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は横ナデを施し、他はナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。21はミニチュア土器である。底部はやや尖り、ナデで仕上げる。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈する。

須恵器杯身の特徴から、溝の時期は8世紀後半と考える。

SD-2 (第14図)

調査区東より検出した南北方向の溝である。最大幅50cm、深さ20cm、検出された長さは5mを測る。底面は平坦で逆台形状を呈する。遺物は出土しなかつたが、埋土はSD-1と同じであることから、

同時に機能していた
と考えられる。

SX-1 (第14図)

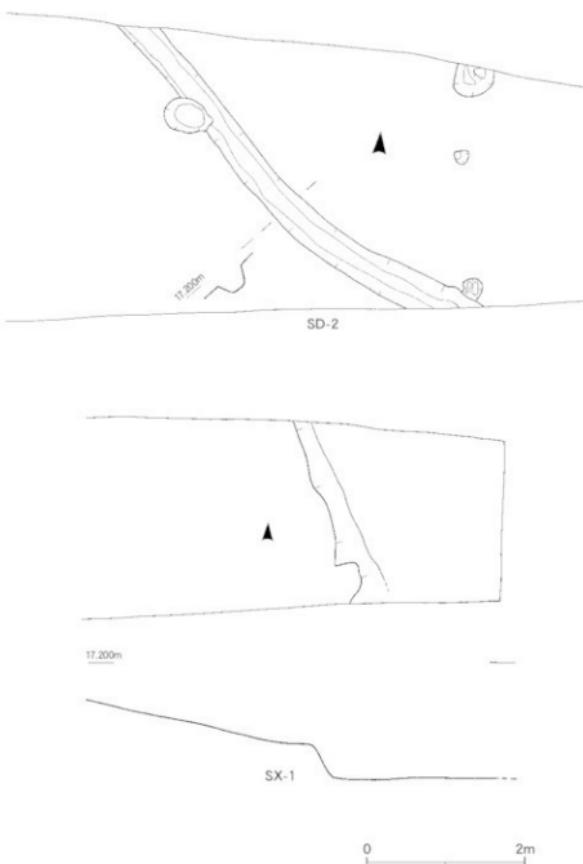
調査区東端で検出した性格不明遺構である。埋土は黒色粘質土であり、人頭大の川原石が多量に検出された。川原石は規格的に配置された様子ではなく、遺構を埋める際に投げ込まれたような状況を呈していた。遺物は出土していないため、時期は不明である。

2) 小結

平田地区では、8世紀後半の溝状遺構や性格不明遺構が検出された。ここでは、8世紀という時代に焦点を当て、周辺地区を概観し、若干のまとめとしたい。

犬丸川中流域の福島や伊藤田地区は、昭和20年代後半の古墳調査を嚆矢として、現在に至るまで多くの発掘調査が行われている。¹ このうち8世紀の遺構・遺物を見た遺跡は、丘陵上の野依・伊藤田窯跡群²、洞ノ上地区的才木遺跡³、福島遺跡⁴などがある。才木遺跡や福島遺跡では単発的に遺構や遺物が検出されたに過ぎず、窯跡を構成した集団の集落の発見には至っていない。7世紀代も含めた大規模集落の発見がこの地域の課題であると言える。

そのような状況の中、平成18年度に大分県教育庁埋蔵文化財センターが行った野依地区条里跡の調査において、該期の製鉄炉や堀、官道の一部が発見された。ここは官道と条里が所在する重要な地點であり、伊藤田窯跡からも至近距離であるため、この地域を該期の拠点集落の候補地の一つに考えることができるのかもしれない。製鉄炉の存在もそれを傍証する好資料と成り得る可能性がある。今後の正式報告を待ちたい。



第14図 平田地区SD-2平面図・断面図、SX-1平面図・断面図 (S=1/60)

さて、犬丸川下流に目を向けると、大規模な集落が展開されている。圃場整備に先立ち行われた定留遺跡の調査では、掘立柱建物や竪穴住居、タコ壺焼成坑などが多数確認された。⁵ 遺跡の立地などから海に関わる集団の存在が推定できよう。今後、福島・伊藤田地区において同規模の遺構が検出されることを期待したい。

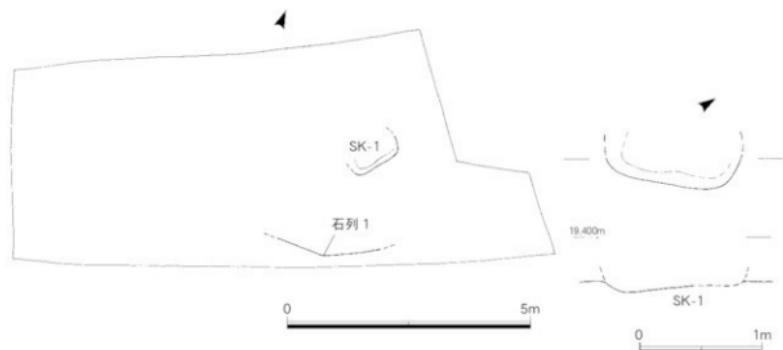
今回、平田地区で発見した該期の遺構は溝のみという単発的なものであった。しかし、河岸段丘上での該期の人々の足跡を確認できた意義は深い。

- (註) 1 賀川光夫『中津市史 古代史』中津市史刊行会 1965 97頁
2 栗焼憲児『伊藤田城山窓跡群』中津市教育委員会 1985
3 栗焼憲児「才木遺跡」「洞ノ上遺跡群Ⅰ』中津市教育委員会 1988
4 高崎章子・花崎徹『沖代地区条里跡 福島遺跡東入垣地区』中津市教育委員会 1996
5 高崎章子『定留遺跡八反ガソウ地区』中津市教育委員会 2006

第4節 長善寺地区の調査

1) 遺構と遺物（第15図）

長善寺地区では、45m²の調査を行った。



第15図 長善寺地区遺構配置図 (S=1/100)、SK-1平面図・断面図 (S=1/40)

現場引渡し後の工事中に発見した遺構であるため、残存状況は良くない。検出できた遺構は土壌1基と石列1列のみであったが、調査区内には遺物が点在しており、他にも遺構が存在した可能性がある。

a. 土壌

SK-1 (第15図)

調査区東よりで検出した。南北方向に軸をとると想定した場合、最大幅110cm、深さは10cm+ α を測る。

遺物は最下層から瓦器碗が出土した。なお、調査区外にも残存率の高い瓦器碗が多数出土したことから、この土壌内のものであった可能性もある。

第16図1から5がSK-1出土遺物であり、いずれも瓦器碗である。

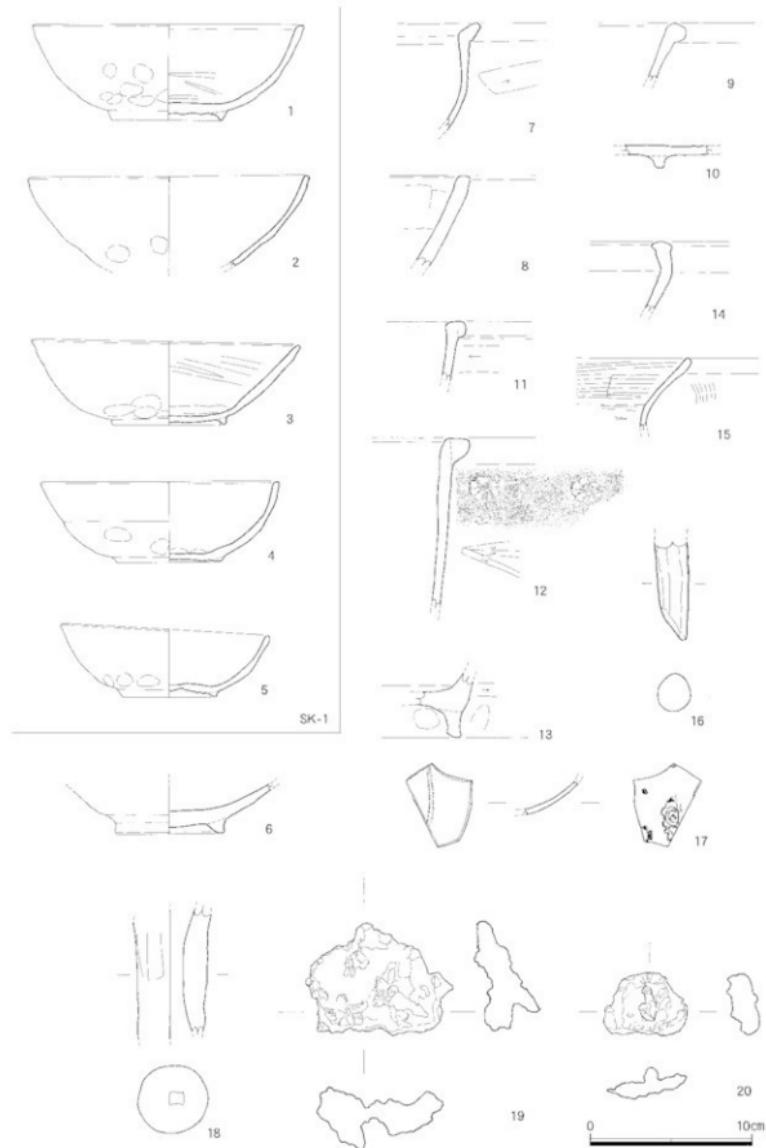
1は復元口径16.8cm、器高5.9cm、復元底径6.7cmを測る。高台はやや高く断面三角形で、体部は内湾しながら立ち上がり、端部で僅かに外反する。外面体部下半に指頭痕が残る。内面体部下半や見込み部分には簡略化されたヘラミガキを施す。底部はヘラ切りを行う。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。2は復元口径17.2cmを測る。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、外面体部下半に指頭痕が残る。内面にヘラミガキは認められない。焼成は良好で、色調は淡茶色を呈する。3はほぼ完形品で口径16.5cm、器高5.1cm、底径6.9cmを測る。高台は断面三角形の部分と扁平な粘土組を貼り付けたものが認められる。体部は上外方に立ち上がる。外面体部下半は指頭痕が残り、内面上部は器壁が荒れているため不明瞭ながらヘラミガキが施され、体部と見込み部の境に強い横ナデが認められる。焼成は良好で、色調は黄白色を呈する。4は口径14.6cm、器高5.0cm、底径6.5cmを測る。高台は扁平な部分と断面三角形の部分からなり、体部は内湾しながら立ち上がる。調整は不明瞭ながら、外面体部下半と内面体部と見込み部の境に指頭痕が認められる。底部はヘラ切りを行う。焼成は良好で、色調は淡黄色を呈する。5は口径12.4cm、器高4.2cm、底径5.6cmを測る。高台は断面三角形で、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、底部はヘラ切りを行う。外面体部下半は指頭痕が認められる。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。

b. 石列 1

調査区南よりで検出した。川原石を並べたもので一部下層にもそれが認められる。遺構の時期は不明である。

第16図6から20は調査区内出土遺物である。

6は土師器碗で底径6.6cmを測る。高台は外縁にやや張り出し気味に付く。外面はナデを行い、内面はヘラ状工具によるナデを施す。焼成は良好で、色調は淡茶色を呈する。12世紀代か。7から15は瓦質土器である。7は浅鉢で、体部は垂直に立ち上がり、端部は上外方へ伸びる。体部外面はヘラ状工具によるナデを施す。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈する。8から10は鉢で、8は内面に縱方向ヘラ削りを施す。焼成は良好で、外面の色調は灰褐色、内面は淡黄色を呈する。9の口縁端部は肥厚する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。10は底部の断片資料である。高台は断面方形



第16図 長善寺地区SK-1、調査区内出土遺物実測図 (S=1/3)

を呈する。焼成は良好で、色調は暗茶褐色を呈する。11は深鉢で、口縁端部は方形に肥厚する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。12・13は火鉢で、12の口縁端部は方形に肥厚する。外面体部下半は横方向へラ削りを行い、端部下に菊花文のスタンプを施す。焼成は良好で、外面の色調は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈する。13は底部で、端部は外側で接地する。外面にヘラ削りを施し、脚部内外面は指頭痕が残る。焼成は良好で、色調は外面灰色、内面は淡灰色を呈する。14は壺鉢で、口縁部は緩く屈曲する。体部外面は横方向へラ削りを施す。焼成は良好で、色調は淡灰褐色を呈する。15は鍋か。口縁部は外反しながら上方へ伸びる。外面は縱方向刷毛目、内面は横方向刷毛目を施す。焼成は良好で、色調は暗茶色を呈する。16は壺の脚で、端部は尖り氣味。全面にヘラ削りを施す。焼成は良好で、色調は茶色を呈する。17は景徳鎮産の磁器片で、外面に宝相華が描かれる。焼成は良好である。18は鞴の羽口で、外面にヘラ削りを施す。焼成は良好で、体部下半は被熱により暗灰色化し、被熱しない上半は淡黄色を呈する。19は碗型滓で、重量139.2gを測る。表面に1cm弱の木炭痕が多量に付着し、小気泡は裏面に多い。赤褐色を呈し、弱い磁性を帯びる。20は鉄滓で、重量37.7gを測る。表面に黒色の鉄滓が錆着している。気泡は大小あるが小気泡が多い。茶褐色を呈し、弱い磁性を帯びる。

2) 小 結

長善寺地区では、SK-1から多数の瓦器碗を検出した。遺構の性格は、遺存状態の悪さから不明であるが、時期は瓦器碗の特徴から13世紀代に比定できよう。周辺の該期の遺跡としては、1992年度第7地点（第3図）の居館跡や前田遺跡が挙げられる。¹ 前田遺跡では井戸から青磁碗や白磁碗、下駄などの木製品が出土し、当時の人々の生活を垣間見せた。一方、平成15年度に行つた、し尿処理施設内の試掘調査では遺構は確認できず、本調査区北側も切り立った崖になることから、河岸段丘上の該期の集落の中心は前田遺跡などが所在する犬丸川右岸にあるのかもしれない。

一括資料は、主として16世紀代の雜器類が出土している。また、鞴の羽口や鉄滓もあり、周間に鍛治関連の遺構が存在した可能性が高い。調査区周辺は山中城などの中世城館や福島地下式横穴や城土地下式横穴など中世の遺跡も多く、今回の発見によって、当地域における該期の遺構の広がりを確認することができた。

(註) 1 栗焼憲児『犬丸川流域遺跡』中津市教育委員会 1997

写 真 図 版



遺跡遠景 ①縫原地区 ②平田地区 ③長善寺地区（調査後）



縫原地区全景（西から）

図版 2



SD-2 完掘状況（西から）



SD-2 完掘状況（東から）



SD-1 遺物出土状況（南から）



SD-1 遺物出土状況（北から）



SD-1 完掘状況



土層① SD-2 埋土（南から）



土層①下層（南から）



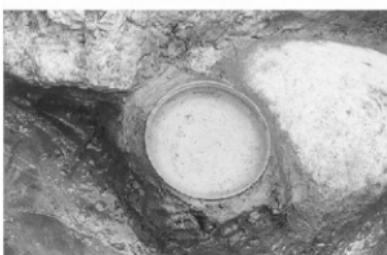
土層②（北から）



土層③（南から）



瓦（7, 10）出土状況



須恵器（1）出土状況

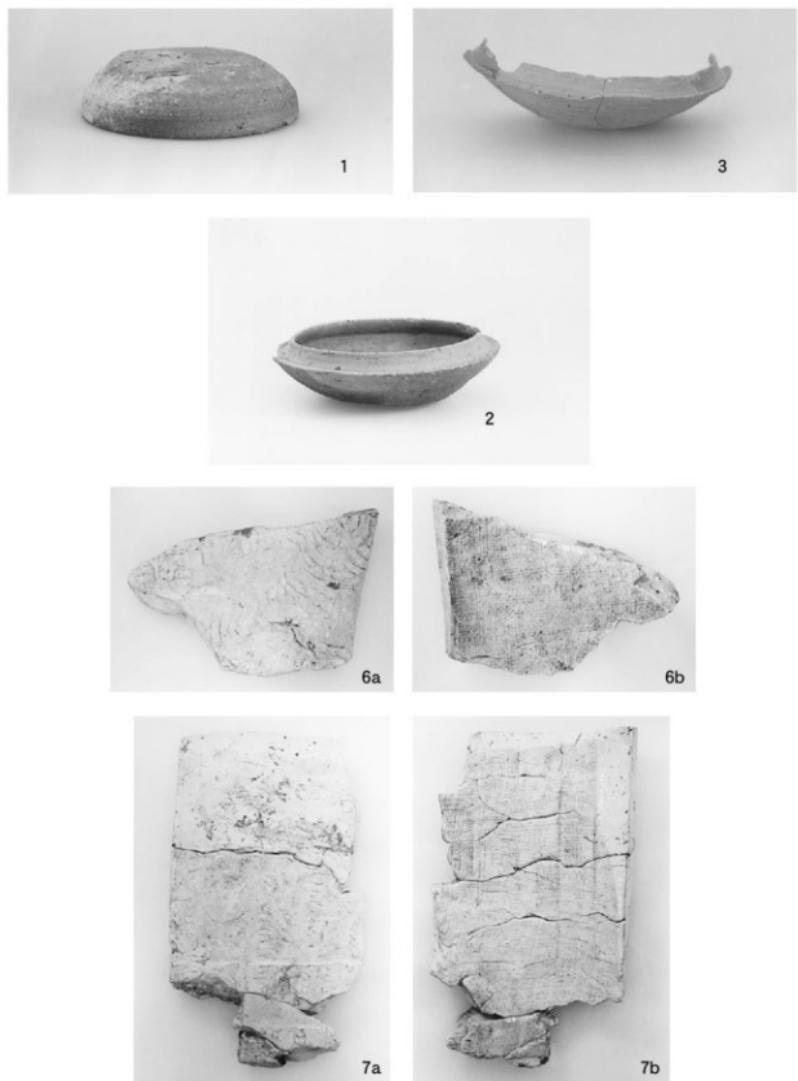


須恵器（15）出土状況

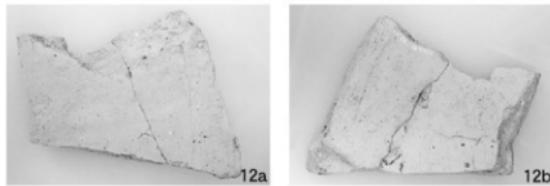
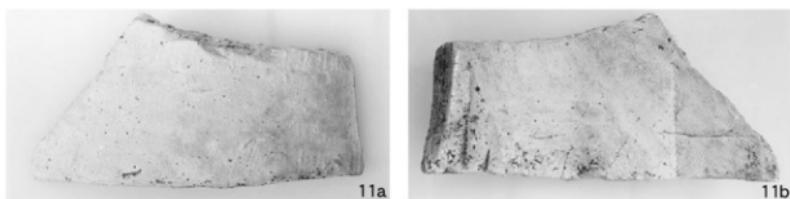
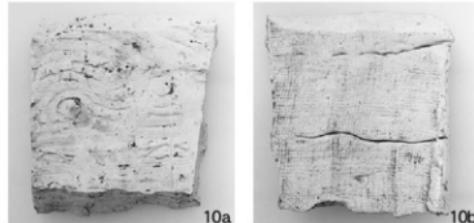
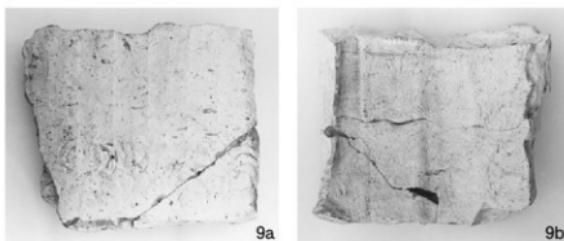
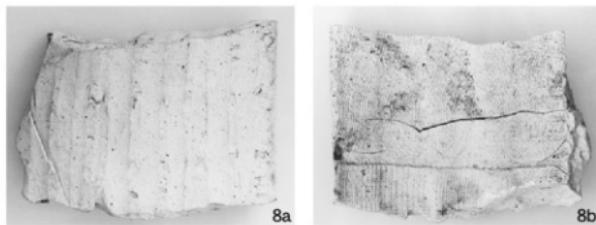


須恵器（14）出土状況

图版 4



缝原地区出土遗物 (1)



縫原地区出土遺物（2）

图版 6



缝原地区出土遗物 (3)



調査区遠景（西から）



SD-1 完掘状況（南から）



SD-2 完掘状況（北から）



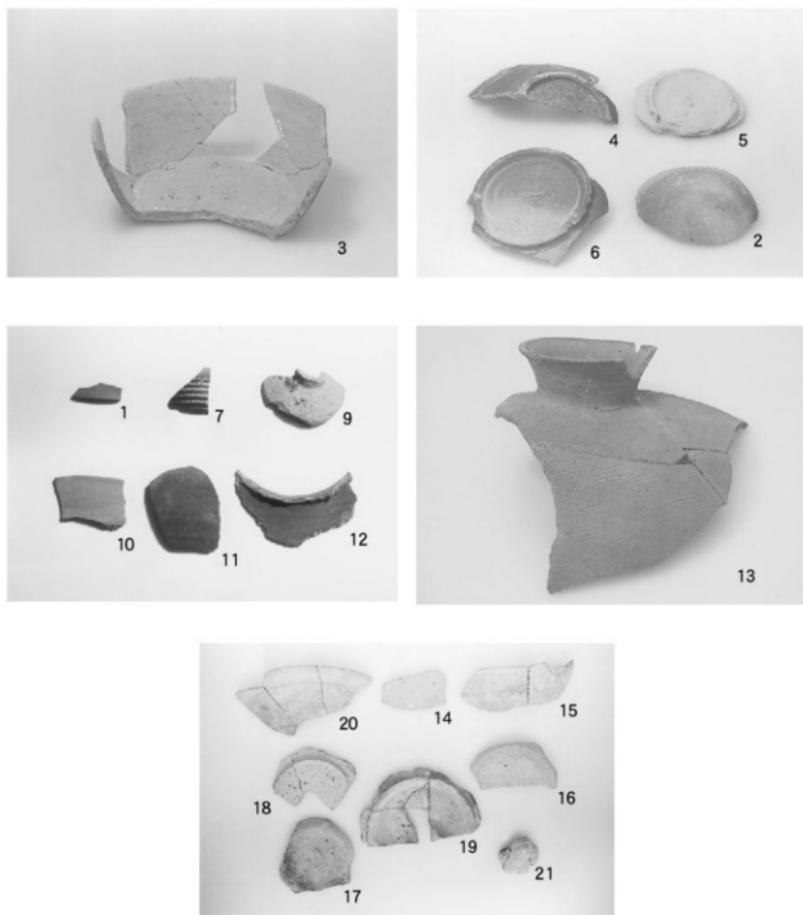
SX-1 検出状況（西から）



SX-1 完掘状況（西から）

平田地区検出遺構

图版 8



平田地区出土遗物



調査区近景（南から）



SK-1 遺物出土状況（北から）



石列1 検出状況（東から）

長善寺地区検出遺構

図版 10



長善寺地区出土遺物

第3章 総 括

平成16年度に行われた市道八丁小平線拡幅工事に伴う犬丸川流域遺跡の発掘調査では、発掘面積は僅少ながら、多くの成果をあげることができた。

縫原地区では、初期瓦が出土し、その多くは凸面調整時に須恵器製作に用いる当具をタタキ板として用い、さらに破面が通常の瓦と逆の凹面側に残る類例の少ない技法で製作されているものであった。これらの特徴からこの瓦は踊ヶ迫窯跡で生産されたことが判明し、共伴した須恵器資料からその実年代を6世紀末～7世紀初頭頃に比定することができた。さらに、同種の瓦はこれまで福岡県上毛町中桑野遺跡へ搬入されたことが判明していたが、今回の発見により、本地点と踊ヶ迫窯跡との瓦における需用供給関係が成立した。これにより、付近に瓦葺建物の存在を想定することが可能になったが、その所在や性格の解明は他日に期すこととなつた。

平田地区では、8世紀後半の溝状遺構を発見した。周辺では該期の遺構の検出例は少なく、貴重な発見となつた。

長善寺地区では、土壌から13世紀代の多数の瓦器碗を検出した。工事途中の発見であったため遺構の性格は不明な点が多いが、調査区からは16世紀代の雜器類の他に、鞆の羽口や鉄滓が出土した。このことから、周間に鍛冶関連の遺構が存在した可能性が高い。調査区周辺の中世遺跡の多さから、改めて当地域における該期の遺構密度の高さを再確認することができた。

以上、犬丸川流域遺跡縫原地区・平田地区・長善寺地区の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。

報告書抄録

ふりがな	いぬまるがむりゅういき いせき	ぬいばら ちく	ひらた ちく	ちょうせん じ ちく				
書名	犬丸川流域遺跡 縫原地区・平田地区・長善寺地区							
副書名	市道八丁小平線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第44集							
編集者名	浦井 直幸							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14-3 TEL 0979-22-1111							
発行年月日	2008年3月31日							
所取遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
犬丸川流域遺跡 縫原地区	大分県中津市 大字福島 1457番地3	44203	101074	33° 33' 131°	~ 50°	20050107 20050204	250m ²	市道拡幅
犬丸川流域遺跡 平田地区	大分県中津市 大字伊藤田 3655番地4他	44203	101074	33° 33' 131°	~ 59°	20050121 20050228	140m ²	市道拡幅
犬丸川流域遺跡 長善寺地区	大分県中津市 大字福島 1311番地	44203	101074	33° 33' 131°	~ 19°	20050307 20050311	45m ²	市道拡幅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
犬丸川流域遺跡 縫原地区	集落	古墳	溝	瓦・須恵器		初期瓦を検出		
犬丸川流域遺跡 平田地区	集落	古代	溝	須恵器・土師器		なし		
犬丸川流域遺跡 長善寺地区	集落	中世	土壙	瓦器碗・瓦質土器		なし		
要約	縫原地区において、6世紀末から7世紀初頭に比定できる初期瓦が出土した。この瓦は、凸面調整に同心円タキを施し、破面を凹面側に見せる特殊な技法で製作されている。踊ヶ追窯跡で生産され、搬入されたことが推測できる。平田地区では8世紀後半の溝状遺構を検出した。長善寺地区では土壙から瓦器碗を検出した。周辺には中世の遺跡が多く存在し、該期の遺構の広がりを確認できた。							

犬丸川流域遺跡 縫原地区・平田地区・長善寺地区

中津市文化財調査報告 第44集

2008年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 藤川原田印刷社